

## 重森三玲の略年譜

明治 29 年 (1896) 8 月 20 日、岡山県上房郡吉川村 (現・吉備中央町) に生まれる。父元次郎・母つる。1 男 4 女の長男、弟 2 人は夭折。名は計夫 (後に三玲と改名)。昭和 50 (1975) 年 3 月 12 日、京都市左京区吉田上大路町で逝去。享年 79 歳。没後 41 年、生誕 120 年。

少年期 祖父は和歌や俳句、父は木彫りや大工仕事を趣味としていた。その影響もあってか、少年時代から絵や書を好み、池坊の生け花と不昧流の茶を学ぶ。父母や祖父母は一人息子が村を離れることを望まず、村の小学校を卒業後は進学を諦め、通信教育で学習。

大正 3 年 (18 歳) 自邸に茶を独習するための茶室「天籟庵」(吉備中央町吉川八幡宮境内に移築) を創作。四畳半に真・行・草の三床を設けた独特な茶室。

大正 6 年 (21 歳) 上京 (想いの人を亡くして)、日本美術学校に入り、日本画を学ぶ。当時西洋から入ってきた表現派、未来派、超現実主義派などの影響を受けた抽象画を描く。同時に池坊龍生派の吉村華藝に立華を学ぶ。生け花の個人教授もする。

大正 8 年 (23 歳) 東洋大学でインド哲学や東洋史を聴講する。此の頃、国会を見学、羽織袴を新調。小説を執筆したりもする。

大正 11 年 (26 歳) 「文化大学院」を創立。通信教育講座「現代文化思潮講義録」を発刊。地方青年の高等教育機関の充実、日本文化をして世界文化の最高位に置かんとする一般国民の思想的発達の為の機会提供、女子の高等教育機関の充実などを趣旨とする。経済的支援者であった父元次郎死去。越智マツエ (後鈴子と改名) と結婚。

大正 12 年 (27 歳) 9 月 1 日 **関東大震災** 「文化大学院」の後援者に挨拶に出掛けようとして羽織袴の正装をした時、地震に遭う。そのまゝ中央線経由で名古屋に出て、岡山に帰る。極暑が続いた夏で、妻子を郷里に先に帰していた

大正 13 年 (28 歳) 郷里の青年に哲学の講座を開き、同時に吉川八幡宮社殿の「特別保護建造物」指定に奔走する。文部省に申請書類を提出に上京。上京途中の 3 月 27 日、京都に下車、石清水八幡宮に参拝して祈願成就を願う。東大建築学科教授で文部省古社寺保存会委員の関野貞博士に面会、現地調査の確約を得る。同郷の田村剛博士の助言により、関野博士を迎えるため、大仙院式の枯山水を自邸に造ることになる。

大正 14 年 (29 歳) 元旦、年頭の所感に 1 日も早い自己の確立を思索する。1 月 2 日、20 人の人夫で枯山水を完成。翌日、関野博士八幡宮調査に訪れ、重森邸に宿泊。田村博士に枯山水の写真を添えて結果報告の礼状を出す。田村博士大仙院式の新作庭園として庭園協会の会報誌「庭園」に紹介して称賛する。3 月 27 日、八幡宮社殿「特別保護建造物」に指定される。計夫の名を三玲に改める。田を耕し茸を採ったりの生活をしつつ、東洋大学に提出の哲学論文を執筆。合格の内達があったが、納入金が高いとして学士号の申請を諦める。また生け花の研究を続け、毎月のように池坊の雑誌「国華」に論文を投稿。村の青年のための哲学講座や寺院夫人のための教育講座なども開く。

昭和 4 年 (33 歳) 京都に転居「僕は牛を扱うのがうまくて、右手で牛に鋤を引かせながら、左手に本を持って読むことが出来た。その時ふと気付いた口人生 50 年、こうしてあと 20 回牛の尻を追ったら、それで終わりじゃ。こうしてはおれん。もう一度東京に出よう。」と、再度出郷を決意する。京都の芸術文化を見て置いたほうが何かと役に立つと思ふ途中下車して花園に仮寓。集中して美

術・芸術全体の研究を行ったが、ことに新しい生け花の創造を強く志向していた。以後華道美術関係の著作を次々と出版する。そのまま京都に永住することになる。

昭和 6 年 (35 歳) 京都に「日本華道芸術学園」を創設。公募による生け花審査展「插花芸術展」を開催。

昭和 7 年 (36 歳) 日本庭園の研究団体「京都林泉協会」設立に参加。中野楚溪を中心にして京大の天沼俊一博士や関口鉄太郎、野間守人等が発起人となり、月一回庭園の見学研究を行う。(今年で 81 周年。5 月の例会が 1,000 回) 以後、庭園と茶に関する著述が多くなる。

昭和 8 年 (37 歳) 勅使河原蒼風、中山文甫、桑原専溪等と「日本新興いけばな協会」設立を構想。11 月、春日大社式年造替の付設事業として新造した社務所の庭園の依頼を受ける。

昭和 9 年 (38 歳) 4 月、春日大社社務所の東庭を完成。(作庭家としての第一作) 9 月 21 日。室戸台風襲来。春日大社も 600 本余の大木が倒れる甚大な被害を受け、北庭の工事を延期。近畿地方庭園被害も甚大。被災前の状況資料がなく、庭園の修復に困窮する。修理復元工事の基礎資料として実測図の制作を京都林泉協会でも討議される。

昭和 11 年(40 歳)全国調査の実測調査を独自で開始。「日本庭園史図鑑」(全 26 巻)を発売。

昭和 12 年 (41 歳) 春日大社社務所の北庭を大正天皇の妃・貞明皇后の参拝に合わせて完成させる。稲妻型の流れをモルタルだけで作る。(皇后一覽の作庭家となる)

昭和 14 年 (43 歳) 東福寺本坊庭園、光明院庭園作庭。(東福寺山内全体の整備を依頼される) 以後作庭の依頼が多くなる。

昭和 18 年 (47 歳) 左京区吉田上大路町の吉田神社の社家を取得して、終生の住居とする。

戦前・戦後=昭和 17~23 年 (46~52 歳) この間、作庭皆無。庭、茶、花に関する文献資料の蒐集と整理を行い、実に多くの著作を出版。なかでも「茶室茶庭事典」(昭和 48 年出版)は名著。

昭和 25 年 (54 歳) いけばな研究グループ「白東社」を結成する。

昭和 26 年 (55 歳) 高野山宿坊・西禅院に作庭。以後次々と 7 坊に作庭する。この年から、自前の職人を擁し直弟子を育成し、作庭家として自立するようになる。

昭和 31 年 (60 歳) 瑞応院庭園作庭。本庭の主石は室戸台風の土砂流出で寺前の谷川に止まったもの。

昭和 37 年 (66 歳) 松下幸之助本邸施工途中で中止。前衛を主張して施主の希望に合わず。作庭は施主の教育が 7 割。

昭和 39 年(68 歳)「庭 重森三玲作品集」を出版。

昭和 44 年 (72 歳) 宗隣寺庭園、常栄寺庭園 (方丈南庭) 作庭

昭和 44 年 (73 歳) 漢陽寺庭園 (池、曲水、枯山水) 作庭。自邸に書院「好刻庵」を建立。軒内を色モルタルで仕上げる。岡山生家の茶室「天籟庵」を吉川八幡宮境内に移築。モルタルだけの露地を作る。

昭和 46 年 (75 歳) 全国庭園の第二次実測調査を開始する。図鑑の復刻の要望がたかまっていたが、新たに追加調査を行って順次「日本庭園史体系」(全 36 巻)として刊行。

昭和 48 年 (77 歳) 漢陽寺門前庭作庭 台風水害によって国道に崩落した大石を用いて築庭。

昭和 49 年 (78 歳) 京都、松尾大社神苑作庭 (遺作) 昭和 50 年 (79 歳) 3 月 12 日寂。

作庭歴約 36 年、作庭数約 190 庭。庭園実測数約 360 余庭。著述数 75